資料６

静岡県立高等学校の在り方検討委員会

（高校教育課）

１　要　旨

教育を取り巻く新たな状況変化や課題等を踏まえ、「ふじのくに魅力ある学校づくり推進計画」（以下、長期計画）で示されている県立高校の在り方について改めて検討するため、学識経験者、教育･産業分野等から幅広く意見を聴取する「静岡県立高等学校の在り方検討委員会」（以下、検討委員会）を設置している。

２　協議事項等

検討委員会では、本県高等学校の在り方について、長期的な視点で幅広く議論する。また、検討委員会の議論を踏まえた課題（論点）に対して、専門的知識を有する者等で構成するＰＴ（プロジェクトチーム）を設置し、研究協議を行う。

検討委員会

基本方針　地域とともに多様性を育む教育の実現

（検討項目）
(1)　「生きる力」の育成に必要な新しい学び
(2)　多様な個性を伸ばす学校の教育環境の提供
(3)　地域による学校支援体制の整備・構築

ＰＴ（プロジェクトチーム）

（論点）
・多様な学びの実現（高校の魅力化・特色化、学びの多様化に向けた効果的な学習手法）
・時代の変化を見据えた学校（適正規模の考え方、学校の在り方の選択肢、小規模校存続の手法）
・地域とともにある学校（学校支援と役割分担、地域人材の育成、学校施設の活用）
・教員の在り方（ティーチャーからファシリテーター、コーチ、メンターへの転換）

３　令和４年度のスケジュール（予定）

時期	検討委員会／ＰＴ	地域協議会
４月～８月	定例会等で今後の検討の概要報告、検討委員会準備等	事前調整等
９月６日(火)	第１回検討委員会	・賀茂地区 (①7/6、②11/24、③3/29) ・小笠地区 (①10/18、②3/27) ・沼駿地区(沼津部会) (①11/14)
10 月～11 月	ＰＴ協議（①10/4、②10/21、③11/9）	
11 月 25 日(金)	第２回検討委員会（ＰＴ意見のまとめ）	
12 月～１月	ＰＴ協議（基本方針(素案)の協議）	
２月～３月	検討委員会（基本方針(案)の協議）	

４　検討委員会・ＰＴ（プロジェクトチーム）の委員構成

・検討委員会は、学識経験者、教育・産業分野及び保護者の代表者等の委員で構成する。

・検討委員会での議論を踏まえた課題に対して、専門的知識を持つ者を招聘し、ＰＴを構成する。

・検討委員会委員のＰＴ委員兼任、又はＰＴ委員の検討委員会へのオブザーバー参加により、ＰＴの協議内容を委員会の議論に反映させる。

≪検討委員会≫

	区分		所属・職名等	氏名（敬称略）
1	学識経験者		静岡大学大学院教育学研究科教授	村山　功
2			静岡産業大学経営学部経営学科准教授	永田　奈央美
3			公立鳥取環境大学環境学部環境学科准教授	川口　有美子
4	教育関係者		静岡県高等学校長協会会長	小関　雅司
5			静岡県私学協会理事長	仲田　晃弘
6	県民	産業	株式会社なすび専務取締役	藤田　尚徳
7			ヤマハ発動機株式会社生産本部モノづくり人財戦略部長	河合　多真美
8			株式会社Ｚ会中高事業本部マーケティング部長	窪田　雅之
9		民間団体	NPO法人 浜松NPOネットワークセンター代表理事	井ノ上　美津恵
10		保護者	静岡県公立高等学校ＰＴＡ連合会会長	三輪　高太郎

《ＰＴ》

所属・職名等	氏名（敬称略）
静岡産業大学経営学部経営学科准教授	永田　奈央美※
公立鳥取環境大学環境学部環境学科准教授	川口　有美子※
株式会社Ｚ会中高事業本部マーケティング部長	窪田　雅之　※
静岡県高等学校長協会副会長	寺島　明彦
静岡大学教育学部教育学研究科准教授	中村　美智太郎
常葉大学教育学部教授	堀井　啓幸

※は検討委員兼務

５　検討委員会とＰＴ、地域協議会の進め方（令和４年度）

(1)第１回検討委員会で検討項目について検討・整理し、ＰＴを設置

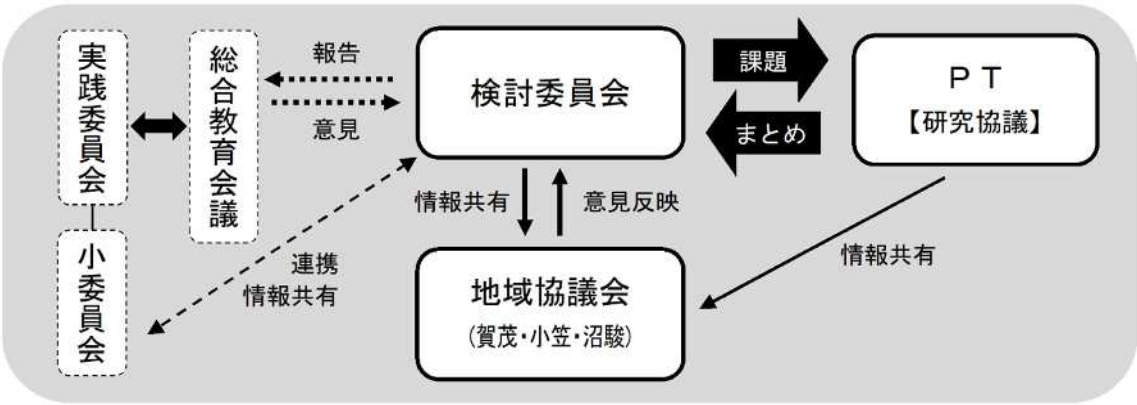
(2)第２回検討委員会でＰＴによる協議内容を踏まえた検討を実施

(3)その後の検討委員会で協議内容を取りまとめた後、「基本方針」として公表

(4)賀茂・小笠・沼駿地区で開催する地域協議会から出た意見等を検討委員会の議論に反映

＊議論の過程は、総合教育会議及び実践委員会に随時報告し意見聴取

＊「才徳兼備の人づくり小委員会」での議論を協議に随時反映



６　在り方検討委員会の議論の状況

（１）第１回（９月６日）

◆論点１：本県の今後の高校教育で重視すべき視点や取組（総論）

【主な意見】

・自ら問いを立てて、深く見極めて協働していく探究的な学びを強めていくとよい。仲間と協働し、互いの違いを引き出し合う力を身に付けることが必要である。

・教員が新学習指導要領、中教審答申「令和の日本型学校教育」、ＯＥＣＤラーニング・コンパス等の趣旨を共通理解した上で、生徒を指導していく必要がある。

◆論点２：在り方検討に向け特に検討すべきポイント（各論）

①県立高校の魅力化、特色化 ②適正規模の考え方 ③小規模校の在り方
④学校施設、設備の整備・充実 ⑤教員のあり方 ⑥地域との連携

【主な意見】

・学校種を超えて、小・中・高で何かを貫くような地域学習が必要である。

・適正規模については、県内一律の基準ということではなくて、地域に応じたある程度の基準を設けて、長期的に考えていくことが必要である。

・過疎地域にある公立の小規模校を簡単に無くすことができないので、誰がどういう形で残していくのか考えていく必要がある。

・どこに住んでいても学科の選択や学びの選択ができればよいが、少子化が進んでいく中で難しい状況にある。

・小規模校を残す場合は、国や県の税収も減っていく中で、運営費用を誰が見るのかというシビアな視点も含めて考えていくことが必要である。

・トイレの洋便器化など、最低限の設備は私立高校と同等レベルにするべきである。

・学校教育だけでは対応できない課題があり、社会教育の知見や社会教育で活躍している人の力を借りる視点が必要である。

（２）第２回（11 月 25 日）

◆協議事項：本県における県立高等学校の在り方に関する方向性（PT 意見のまとめ）

【主な意見】

・高校を生徒にとって様々な選択肢のある場とするのか、あるいは、ある程度の専門性を深めていく場とするのか、保護者の意見も吸い上げていくとよい。

・農業高校については、スマート農業の中でＡＩ等を取り入れていく方向に進んでおり、農業にも工業の要素が入っている。専門学科の方向性についても考えていく必要がある。

・ＩＣＴやインフラの環境整備が進むことで、学校間の共同学習や外部のリソースを活用して多様性や協働的な学びが実現できる可能性が広がっていき、学校の魅力化や小規模校の維持にもつながっていくのではないかと考える。

・公立高校として、どの地域でも公教育を受ける保障をする必要があるので、ＩＣＴを活用するなど、柔軟な考え方が必要である。

・昨今、生徒が人間関係を修復する力が衰えてきていることから、クラス数が少なくなりすぎると人間形成を学ぶ場としては相応しくないと考える。

・小規模校は教育に集中できると思うが、教員を増やす等の必要がある。誰一人取り残さないということで、どんどん足し算になっているのではないか。

・地域連携と外部人材の活用は、全ての論点に関わることである。教員が福祉面から支援することは大変であるため、地域の社会的資源を取り入れることが大切である。

・なぜ高校を魅力化しなければならないのかを押さえた上で、これまでの課題を踏まえ、これからの方向性や実現のための具体的アイデアを議論する必要がある。

資料７

県立高等学校の在り方に係る地域協議会

（高校教育課）

１　要　旨

急激な時代の変化を踏まえ、第三次長期計画の内容と現状の間に乖離が起きたことにより、改めてその在り方を検討することとした。そのため地域の声を聞く地域協議会を今年度は３地区において設置した。

２　開催状況

賀茂地区	委員	関係首長、市町教育長、同窓会長、ＰＴＡ会長、産業界代表者、高校長、中学校長
	開催状況	**≪第１回≫** 日　　時：令和４年７月６日　※下田総合庁舎 協議事項：賀茂地区における今後の県立高校の在り方について 【主な意見】 ・全ては子供たちの未来のためにどうすれば、どのような環境があればいいかを第一に考えたい。 ・最後は県が決断してほしいが、４校残してほしいと考えている。その方策として、例えばキャンパス制の導入が考えられる。 ・多様な選択肢に応えられるような学科、コースができると県立高校を希望生徒が増える。 **≪第２回≫** 日　　時：令和４年 11 月 24 日　※下田総合庁舎 協議事項：賀茂地区における今後の県立高校の在り方について 【主な意見】 ・学校は地域に必要な存在であり、残してほしいが、学校規模も大きいほうが良い。生徒数減少の中、10 年、20 年先を見越して考えたい。 ・保護者の通学費負担という視点も入れて議論をしてほしい。 ・普通科をベースに、特色ある学びについての選択肢をカリキュラムの中で設けるのが良い。
沼津地区	委員	沼津市教育長、ＰＴＡ会長、同窓会長、産業界代表者、高校長、中学校長
	開催状況	**≪第１回≫** 日　　時：令和４年 11 月 14 日　※沼津商工会議所 協議事項：沼津地区における今後の県立高校の在り方について 【主な意見】 ・子どもの目線を重視して、生徒の意見を幅広く聞くことが必要である。 ・人口減が進む中で沼津地区に、「どのような高校が必要か」、「どのように魅力的な高校を作っていくか」、地域を巻き込んだ議論が大切である。
小笠地区	委員	関係首長、市教育長、ＰＴＡ会長、関係団体代表者、産業界代表者、高校長、中学校長
	開催状況	**≪第１回≫** 日　　時：令和４年 10 月 18 日　※小笠高等学校 協議事項：小笠地区における今後の県立高校の在り方について 【主な意見】 ・地域協議会で地域全体の議論を通じて、よりよい高校の方向性が定まればよい。 ・高校が廃止されると、地域活性化等でマイナスが大きい。 ・今後の急激な少子化を考えると、さらに学校が小規模化して存続が危ぶまれる状況を懸念する。

資料８

令和４年度「未来を切り拓く Dream 授業」開催結果

１　要　旨

平成30年度から実施している「未来を切り拓く Dream 授業」は、新型コロナウイルス感染症の影響を受け、令和２年度は中止とし、令和３年度は前期（オンライン）・後期（１泊２の対面）により開催した。令和４年度は、３年ぶりに３泊４日で開催した。

２　開催結果

(1) 開催概要

日　　程	８月２日（火）～ ８月５日（金）（３泊４日）
場　　所	静岡県総合教育センター（掛川市）
参加人数	県内の中学１・２年生 30 人（応募者 114 人から抽選）
主な内容	・講義（講師７人及び１団体） ・ＡＬＴ、過去参加者との交流 ・ＳＰＡＣ俳優による表現指導 ・グループディスカッション・発表（テーマ：理想のまちをつくろう）

(2) 講師

（50音順・敬称略）

講　　師	役　職　等
渥美　万奈	ソフトボール元日本代表・東京オリンピック金メダリスト
加藤　種男	アーツカウンシルしずおかアーツカウンシル長
加藤百合子	(株)エムスクエア・ラボ代表取締役
川勝　平太	静岡県知事
杉田　精司	東京大学大学院教授
高畑　　幸	静岡県立大学国際関係学部教授、実践委員会副委員長
矢野　弘典	（一社）ふじのくにづくり支援センター理事長、実践委員会委員長
SPAC 劇団員	(公財)静岡県舞台芸術センター

(3) ユースリーダーの運営協力

・過去の未来を切り拓く Dream 授業及び日本の次世代リーダー養成塾の参加者８名に運営協力を依頼した。

・過去の参加者と交流することにより、当該年度の参加者同士のつながりだけでなく、年度を超えた縦のつながりを広げ、お互いに刺激を与え合うことで、教育効果を更に高めることが期待できる。

川勝知事による講義

ＡＬＴとの交流

グループディスカッション

(4) アンケート結果

ア　「未来を切り拓く Dream 授業」に参加して良かったか

評　　価	人数	割合	
とても良かった	21 人	75.0%	96.4%
良かった	6 人	21.4%	
普通	1 人	3.6%	
あまり良くなかった	0 人	0.0%	
良くなかった	0 人	0.0%	
計	28 人	100.0%	

※オンライン参加者及び途中帰宅者除く28人

イ　参加者の主な感想

〇とても良かった、良かった

・グループディスカッションなどを通して成長できた気がする。
・仲間と一緒に行動し、何かをするというのも楽しかった。
・いろいろなすごい人の話を聞いて、自分の夢に対する視野が広がった。
・将来の夢に一歩でも近づくための手がかりを見つけることができた。
・グループで意見をまとめて発表する力をつけることができた。
・同じ中１、中２の子でもこんなに具体的な夢を持っているのだと、今の自分を見直すきっかけとなった。

〇普通

・講義の時間が少し長いと感じた。

ウ　保護者の主な感想

・好きなこと、興味あることに対してより前向きに取り組むようになった。
・勉強が自分の望む未来につながるというモチベーションで取り組むようになった。
・分からないことは自分から教えてくださいと言えるようになった。
・時間を決めて行動するようになった。
・問題に対して、解決方法を自分で考えて提案するようになった。
・自分が世の中に役立つことを以前より考えるようになった。
・自分の考えを自分の言葉で発表したり、伝えることができるようになった。
・生徒会役員選挙に立候補した。
・新聞を読むようになった。
・学年代表として発表する際、驚くほど堂々と発表していた。

３　今後の取組

・未来を切り拓く Dream 授業を継続的に開催し、自らの能力を更に伸ばすきっかけづくりを行う。
・ユースリーダーとして、過去の未来を切り拓く Dream 授業及び日本の次世代リーダー養成塾の参加者に運営協力を依頼するとともに、過去参加者による同窓会の開催等により、ネットワークづくりを推進する。